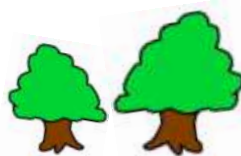


福祉に



森



ができること

～作業所と一緒にいる森からの創造～



NPO 法人 MORIMORI ネットワーク
連携:「あらかわモデル」創造プロジェクト



NPO 法人 MORIMORI ネットワークは山村と都市の交流を中心に約 20 年間活動を行って来ました。次世代に森の大切さ、森の楽しさ、面白さを伝えたいと、子どもたちのための「森の実験基地」をつくり、そこにはさまざまなかたちをしたツリーハウス、おがくずを使用したバイオトイレ、みんなで集まり語り合えるウッドデッキ、12 角形のサークルハウスなど、森と共存できる建造物を創っています。

埼玉県飯能市の長沢での活動に、荒川区にある福祉施設の職員さんたちが参加してくれるようになりました。きっと、森と作業所が一緒にできることがあるのではないかと。利用者さんたちをみていると、そんなことを直感的に感じて、ともかくやり始めてみました。この冊子はこの1年の活動をベースにしてまとめたもので、まだまだ「はじめの一步」に過ぎません。

「森」が「福祉」にできることは何か？これはあまりにも大きな命題ですが、できるところから、できることをやって行きたいと思っています。

この出会いをつくってくれた「あらかわモデル」創造プロジェクトをはじめとして、この事業にご協力をいただいたみなさまに心より感謝いたします。

NPO 法人 MORIMORI ネットワーク 同



作業所に緑の風を！

一緒に何かできるのではないかと訪れた作業所には、残念なことに初めは木の香りも花の香りもありませんでした。そこで、荒川福祉作業所と荒川生活実習所の施設公開に向けて、緑の風を森から吹かせてみよう、ということになりました。

●木の皮に手形を押してみよう ●

森にある木の皮にみんなの手形を押して、今回の施設公開のシンボルにします。

森から木の皮が届きました！作業開始



ポスターカラーで手に色をつけます。
何色がいいかな？



みんなで力を合わせて、木の皮に手形を押します。力を入れて！
うまくいきますように！



順番に手形が出来上がってきました！
なかなかいい感じですね

● 木と緑と花を所内に置こう ●

みんなが緑や花を楽しめるように「花ポット」に花を飾り、「花ワゴン」でどこにでも移動できるようにします。「花かかし」は入り口でお迎えます。

花ポット

ポットは森の中で作って持ってきました。これにやすりをかけて、オイルを塗って仕上げていきます。そして、自分の好きな花をさしていきます。



作業の説明を聞きます



やすりをかけてポットの表面をきれいに



オイルを塗って色を整えます



～MORIMORI ネットワークの小島さん(建築家)から～

利用者の方と作業を並んでするようにしました。そうすると、気持ちを一つにすることができ、近い仲間として認められたような気がしました。作業が良く出来たときには、非常に嬉しそうな混じり気なしの100%の笑顔を見せてくれたのがうれしかったです。



出来上がり!



花をさします

花ワゴン

かたつむりのように移動しますから、いつでも、どこでも、だれでも草花が楽しめます。



ま
す
板
を
組
み
立
て
て
ワ
ゴ
ン
を
作
り

まるでインテリア雑誌に登場するような花ワゴンの登場!



花かかし

施設の入口にも森の雰囲気をつくろうと「花かかし」を置きました。花ポットを下げ、ツルを飾って仕上げていきます。



森で製作した花かかし
の柱を運びます



花ポットを飾ると入
口が明るくなりました



もっと森の雰囲気を
出さなくては！



こんな感じでいかが
でしょうか？

● 施設公開に向けて頑張ります！！ ●

施設全体の飾り付けに森から集めて来た枝やツタを使いました。壁も森の
雰囲気でもりあげます。



入口の看板もすっきり
森のイメージに



いよいよ施設公開の日



～職員さんから～

重度の知的障がいを持つ利用者さんが、話を集中して聞き、その作業をしっかり見て、「やりたい！」と自分から始めたことに感激。素敵な本物を作り上げることへの期待と魅力、大道具を使うかっこいい作業、木の香り…貴重な時間でした。



普段利用者さんが経験できないことであり、みなさん普段見せないような表情をしていました。大切でかけがえのない時間を過ごさせてもらえたなと思います。

森を体験しよう！

MORIMORI ネットワークの活動フィールドが埼玉県飯能市の長沢にあります。施設の職員さんたちがこの森で間伐を体験したり、パン窯づくりに参加しました。

● 初めての間伐体験 ●

成長した木の間隔がせまくなると、光が入りにくくなり、養分も行き渡らなくなります。そこで間隔を広くするために行う仕事の間伐です。この日はパン窯を囲う小屋の支柱にするための木を間伐しました。



間伐する木を選んで一本一本伐ります 木を選び出します 木を伐るなんてスゴイ チェーンソーにも挑戦

～参加した職員さんから～

“自然とともに共存する”ということを感じ、立ち止まって考える好機となりました。一日を通して森の偉大さや自然の恵みを全身で感じ、体が喜ぶ最上級の癒しであるとも感じました。森の恵みを分けていただき、ありがとうございました。

ゆったりと過ごす時間を共有していると、初めて出会う方でも自然体で会話をし、楽しむ自分がいることに驚きました。緑の中で癒されて、ともに時間を過ごしていると、自然に人と繋がって新しいものが生まれそうな場所・・・そんな風に感じました。

電車から降り立つと東京では味わえない空気、そして森林が迎えてくれて、とても清々し気持ちとなりました。木の皮を剥がす体験を初めて行い、苦戦しながらも時間を忘れるほど集中しました。自然と戯れることが、これほど楽しいと思えたのは久しぶりでした。



今日の間伐は終わり！
お疲れさまでした

●パン窯づくり●

森の中でおいしいパンやピザが食べたいとパン窯づくりをしました。



間伐した木の皮をむきます



窯を囲う小屋を作ります

窯のレンガを積んでいきます



窯に火が入りました!!

今日はピザを焼いてみました
おいしそう!!



感想

自然の中、パン窯で焼いたピザをおいしくいただきました。この雰囲気の中で食べるピザはやはり格別。自然に触れ、目を向ける事で、普段は見過ごしていることを気付かされました。ゆったりとした時間が流れていたはずなのに、あっという間に一日が終わりました。

●森で楽しいコミュニケーション●

森にはいろいろな人たちが集まって来ます。森での話はいつまでもつきません。森はたくさんの出会いをくれます。

感想

無心に木を切ったり、木が生きてきた年月を考えたり、木々や草花の移ろいを感じたり、コーヒー飲んだり、屋根を拭いたり、初めてインパクトを使わせてもらったり…ずっとやりたいと思っていましたが新たな体験でした。



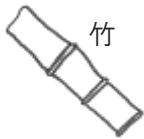
荒川生活実習所でのワークショップ

施設公開に向けての作業を一緒に行う中から、荒川生活実習所の利用者さんと、森の素材を使ったワークショップをやってみよう！ということになりました。

竹や木など自然の素材を使ったものづくりは、利用者さんたちの創造する意欲を引き出してくれるようです。今日は、竹を使ってマイコップとマイ箸づくりをします。他の作業所からも参加してくれて総勢 25 名の参加になりました。作業所が一緒に何かを行うことも少ないので、それも楽しい試みの一つになりました。

第1回 竹を使ってマイコップとマイ箸づくり

《準備するもの》



竹

カナヅチ



ナタ



ノコギリ



サンドペーパー



作業の説明。
講師は小島洋児氏



ノコギリを使って竹を切ります。
コップは竹の節を利用



竹を縦に細くナタで割ります。
ナタは初めてで緊張気味



箸をサンドペーパーでゴシゴシ



みんな真剣に頑張っています

出来上がりました！
さっそく使ってみたいですね



第2回 まるで絵馬のように！板絵づくり



ノコギリで板を切ります



ヤスリで整えます



電動ドリルで穴あけ。ウィーンという音がプロっぽい



自由に絵を描きます



ハンドドリルでも穴を開けます



出来上がりがイメージ

本当に楽しかった。またあったらやりたい。今までやったことのないことだったので新鮮だった。

参加した利用者さんから

コップに飲み物を入れると竹のいいにおいがします。ヤスリで削るのが楽しかったです。

いつも扱う素材(紙やペンやのりなど)ではなく、木や竹で何かを創りだすことは非常に刺激的ですし、ノコギリやカナヅチ、ナタ、ドリル…日常ではなかなか使わないものを使える誇らしさなど様々な経験と、ワクワクがあったと思います。

職員さんから

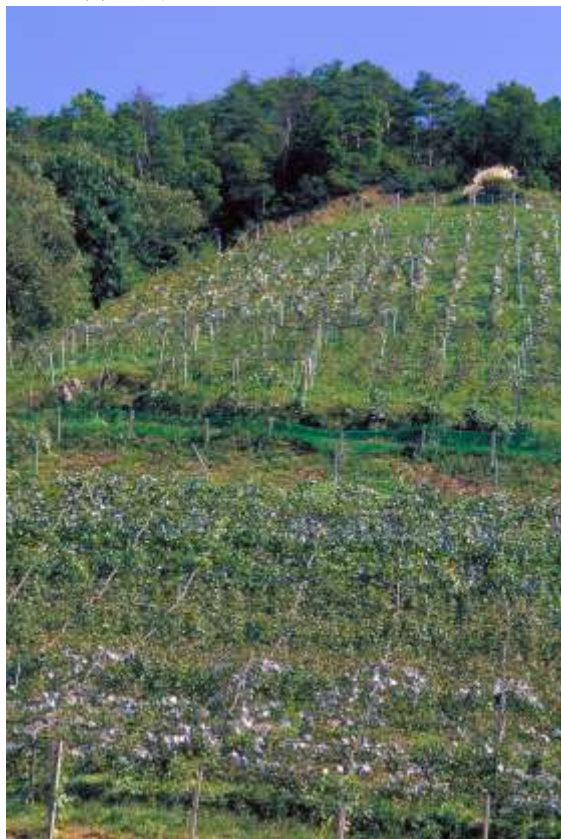
参加されたメンバーさんが「いいものが出来た！」と目を輝かせていました。経験できない事を経験し、とても真剣な目で取り組んでいるのを見ることができました。また、メンバーさんと自然の物に触れ、ものづくりを通して楽しい体験をしたと思います。

利用者さん一人ひとりがノコギリを使ったり、ナタで切ったりと、今まで経験出来なかったことに取り組んでいる姿がとても印象深く、機会があったら多くの利用者さんが参加されたいと思います。

森と福祉の**出会い**から生まれたもの

1 ココ・ファーム・ワイナリー

森が育む力をワインにこめる



こころみ学園の大いなるこころみ

1950年代、当時特殊学級の教師だった川田昇さんと中学生たちによって、開墾してつくられた葡萄畑が始まりです。「知恵おくれ」と言われる少年たちの働く場をつくろうと農地を探しましたが、手に入れることができたのは、38度の急斜面の場所でした。南西に向いた急斜面は陽当り、水はけがよく葡萄づくりに適していましたが、耕運機やトラクターが使えず作業は人間の手によって行いました。慣れない農作業の中で多くのことを乗り越え、少年たちは自分で力をつけ、逞しい農夫に育っていきました。このこころみは、ワインがまだ日常的に飲まれなかった時代に始まりましたが、今大きな評価を受けても、それに惑わされず創立の信念を貫く姿勢は、日々の寡黙な営みがいかに大切であるかを教えてくれます。

ココ・ファーム・ワイナリーのワインづくり

1984年ワインづくりをスタート、化学肥料・除草剤を一切使わない畑で育てられた葡萄を使用し、醸造場での醗酵も天然の野生酵母や野生乳酸菌が中心です。ワインは醸造場だけでつくられるのではなく、太陽や土や雨や風などの自然、野生酵母などの微生物、葡萄畑にある草花や虫や鳥、そして人間の力、そのすべてが関わってできるものです。熟成のための時間も人間が操作できることはありません。葡萄の声に耳を傾け、葡萄がなりたいワインになれるよう力をつくすワインづくりです。



山の斜面を切り開いた葡萄畑とその周辺



葡萄畑で作業する学園の園生たち



醸造所にて選果作業。仕込みに、ビン詰に、園生が活躍します



出来上がったワインがズラリと並びました

社会福祉法人こころみる会

障害者支援施設 こころみ学園
多機能型事業所 あかまつ作業所
共同生活援助 あげぼの荘

活動: ブドウ栽培 しいたけ栽培 ワイン醸造 山里整備他
葡萄栽培面積: 6万平方メートル ワイン醸造数: 年間 16万本
栃木県足利市田島町 616

2 さんわーく かぐや 人がその人らしく生きる暮らしを求める



初めは猫の額ほどの田んぼ。今では 2 反になりました

小田急線の善行駅から住宅街を歩いて 5 分、小さな家の脇の道を降りて行くと、周囲とは空気が異なる広場がありました。やさしく人を受け入れてくれる空気、そこでは誰の間にも境界がなくなるようです。その中に、竹林、畑、作業場、アトリエ、鶏小屋、薪、堆肥、丸太、木彫りの彫刻などが自由自在にあって・・・楽しそうな日常の様子が伺われます。

2008 年彫刻家の藤田さん一家がアトリエだったところを、障がいを持つ人たちが集まれる場にしました。きっかけは、重度の精神障がいを持つ娘さんの居場所をつくりたい、という思いからでした。アーティストの自由な発想が生きています。

副理事長の藤田靖正さんのお話

福祉施設らしからぬ場所を目指して

ここは定員 10 名のアットホームなところですよ。私たちは福祉施設という言い方はしていません。福祉らしからぬ場所、家族のような関係を目指しています。障がい者という言葉は、自分たちと違うんじゃないかと思わせるような強い言葉ですが、メンバーと接していただいたら、自分と何も変わらないんだということを感じていただけたと思います。



フィンランドの最新斧で



塩から手作りの梅干し



手作りのアニマルの植木鉢



丸太の腰掛け作り

活動のメインは農作業と創作活動

農作業と創作活動の二つを、どちらも、ものづくりということで同じだと考えています。竹細工は竹の伐採から、藍染は種を撒くことから、瓢箪細工も瓢箪の種を撒くところから始まります。ゼロから創り出すことがこの基本ですから、さまざまなものを自然素材から作ります。そうやって自然と接して、生きる力を取り戻していくことが、大切だと思っています。

職員も利用者もボランティアもマゼコゼ

自然の素材は一つ一つのかたちが違いますし、栗の木を伐るとアクが強いので、ノコギリの歯が真っ黒に染まる。レモンの木はレモンの香りがする。クスノキは樟脳の香りがする。それぞれ硬さも、色も重さも違う。それらの木を削りながら、自分で体感していきます。自然が心の感性に働きかけてくれるんです。

ここは職員も、ボランティアも、利用者も、遊びに来た人もマゼコゼ。一見して誰が職員かわからない。おたがいにできることをできない人に教えるだけ。土と一緒に耕し、一緒にこねます。上下関係ではなく水平の関係でつきあっていきたいです。



お餅つき。臼も杵も餅米も手作り



蜂の巣箱を設置



名古屋コーチンが卵を生みました

気持ちを伝えるツールとしての自主製品

ものを作ることよりも、創り出すという行為を大事にしていますので、売ることにはあまり重きを置いていません。自主製品は、一人ひとりが伝えたいことを、伝えていくためのツール。それを受け止めてくれた人は、創った人の個性を受け止めているのだと思います。それが資金につながっていく可能性があります。ここでは、工賃というよりは、自分で作ったものを持って帰る、採れた野菜を持って帰る。生きる、暮らすということをメンバーたちと一緒にやらせてもらっています。「さんわーく かぐや」は面白い人が集まる場にしていきたいです。



特定非営利活動法人
さんわーく かぐや
神奈川県藤沢市本藤沢 6-12-1

「さんわーく かくや」見学レポート

驚きの手作り工房

施設のほとんどのものは手作り、食事も食材も皆自分で作ったもの。調味料の味噌から塩までも手作り。ものづくりは彫刻、陶芸、絵画と何でもありの、驚きの手作り工房でした。



藤田靖正さんの作品



煙が食欲をそそります

お互いを喜び、助け合っている場所

全員での作業は田んぼや畑、個人では、絵を描く人、刺繍が得意な方、薪を切る人、各自の想いを大切にし、お互いを喜び、助け合っているように感じました。人の生活の原点、社会のあり方の原点を見る思いでした。障がい者もなく、健常者もなく、同じ人間として今を生きる仲間として助け合って生きて行く。全てを手作りされることで、自然の大切さ、生命の大切さ、ありがたさが解るのだと思います。



竹笛作りをしました



メンバーさんからのプレゼン

小さな場所が大きな影響を与える

こんな当たり前を、しっかりとした理念を作り、施設として運営されている所があったのですね。関係者の皆さん全員、生き活きとして目を輝かせて活動されていました。これからの新しい時代のモデルケースを見た思いです。小規模でも、生命を大切にすれば、その方が社会には、よい影響を大きく与える事が出来る。この様な場所が、あちこちと出来る事がよい社会を築いて行く道だと思いました。(T・S)



音が…出たあ！



竹ビーズに糸を通します

～感想～

工賃アップだけではなく、今を生活している時間を大切に、寄り添う支援がここにあると思いました。「障がいがあってもなくても、ともに考え、ともに働き、ともに支え合い、地域に暮らす一人としてできる役割を担いあって生きていく」の基本を学ぶためにふさわしい自然環境に恵まれた場であるし、うらやましいくらい多様なことができそうな拠点です。利用者がありのままの自分を表現でき、尊重される場にするに、多くの時間とチカラを注ぎ込むスタッフに、エールを送り続けたいと思いました。

私には 20 代後半の知的障がいを持つ息子がいます。父親として何かできるのではないかと、という思いを持ち続けてきました。さんわーくかくやさんは、親が先頭に立つのではなく、地域の関わりからたくましく伸びた、素晴らしい事例だと感じました。葡萄の木は自立して日光を求めて伸びるのではなく、宿り木として他の木に頼って枝を広げるしか生きる道はありません。山の斜面で、根の位置から数十メートル下の木に取り付く宿り木の巨木があります。長い年月をかけて、取り付いて倒れては隣に移り、下へ下へといったのでしょう。そんな生き方があって良いのです。ここに通う人たちは自分の居場所、枝を伸ばす場所をしっかりと掴んでいるなど感じました。突然の訪問客を暖かく迎えてくれる、安定した感情が育まれているのがよくわかりました。

苗木を育てることが生き甲斐につながる

進和学園では、宮脇昭先生(横浜国立大学名誉教授)との出会いから「いのちの森づくり」=「その土地本来の木による本物の森づくり」を始めました。机に向かって作業が苦手な知的障がい者の人たちは、土に触れ、水をやり、雑草をとり、苗木を育てる仕事に生き生きといていないに取り組み、苗木も元気に育ちます。また、苗木の販売や「森づくり」に係わることで工賃にもなります。「いのちの森づくり」を始めて約10年、苗木の出荷本数は間もなく20万本に達します。森づくりの活動は学校、保育園などにも広がっています。



ポット苗を持って



湘南国際村での植樹



丁寧な苗木を育てます



宮脇昭先生とともに

社会福祉法人進和学園&株式会社研進 神奈川県平塚市万田475番地

福祉が森にできること

福祉が森にできることは3つある。ごく小さな森を地域の人々と連携しながらになるが、森を守ること、森に人を呼びこむこと、森を賑わすことだ。高齢化によって森を管理できない地域は、福祉作業所と連携して利用者さんを森に連れて行き、管理の仕方を指導してみしてほしい。それを機に支え合おうとする人々が集まり、ものづくりをしてみようとか、イベントをしてみようかといった話も出て賑わってくるのではないだろうか。

福祉作業所は全国に1万箇所以上あり、多くはそこで作業する障がい者の工賃(給与)が安すぎる悩みを抱えている。しかし中には廃れゆく伝統工芸や民芸、職人技を継いだり、田畑を守る作業所もある。地域への貢献ができてきているのだ。ゆっくりでもコツコツと同じ作業を繰り返すことができる障がい者は多い。力仕事を厭わずできる人、独創的なものづくりをする人など、特性さえ活かせば、効率化ばかり求める現代社会とは対極の古き好き暮らしを取り戻す仕事も、森を守る仕事にも、取り組むことができるはずだ。

羽塚順子 (MotherNess Publishing 代表)

森林療法からのアプローチ

インタビュー 上原巖先生(東京農業大学森林総合科学科教授)

森林療法の対象になる方は、一般の健常者、罹病者、高齢者、障がい者、子どもなどですが、ここでは、障がいを持つ方と“森林療法”について伺いました。

森林療法とは

森林環境に自分の心身を委ねて、日頃の生活や自分自身をゆっくりと振り返り、自己の生命力や自己治癒力を回復させる療法です。同時に人の手が入らずに荒廃した森林の手入れをして、森林の健康も回復させていきます。その手入れが作業療法の一つにもなります。具体的な内容としては、森林散策、森林内での作業療法、リハビリテーション、リラクゼーション、森の中でのカウンセリング、呼吸法などがあります。何もしないで、ただ、静かにゆったりと過ごしたり、森の中で絵を描いたり、創作活動を行うことも森林療法と言えます。

「森林浴」との違い

よく聞かれる言葉に「森林浴」があります。森林を楽しみながら散策する「森林浴」は、森林療法に含まれます。その場合は対象となる人のニーズや状況に合わせて、治療や健康増進のため、または生活習慣病の予防や、心身のリハビリテーションなどの目的があります。その手段として「森林浴」を行うのが「森林療法」です。



地域の森林公園での定期的な散策(山梨の福祉作業所)

森林療法を行うきっかけ

大学で林学を学んで、故郷の長野で高校の教師になり、養護学校で教えることになりました。生徒は重度の知的障がいの子たちでした。「英語や数学よりも、この子たちがより人間らしく、生活できるようなことをやってください。あなたのフィールドに子供たちを連れて行ってください」というのが、その養護学校の校長先生の考えでした。

養護学校では、いじめもあり、ケンカも多い。取っ組み合いのケンカをしますけど、山に出かけると、みんな穏やかになり、手をつないで帰って来たりします。これは山には感情を落ち着かせる効果があるのではないかと。何か心に科学的に作用するものがあるのではないかと・・・そこから森林療法を思いつきました。

体育の時間に、体育館の中では、まったく運動をやらない子ども、山へ連れて行くと、走ったり、川へ飛び込んだりするんです。養護学校で気づいたことが森林療法の基礎になります。



作業所に隣接している里山の手入れ作業(神戸市の福祉作業所)



里山で伐り出した木で、シイタケ原木をつくります(山梨の福祉作業所)

障がいを持つ方は自然環境に敏感に反応する

知的障がいの方にとって、コンクリートの建物の中の人工的な環境はあまりよく作用しません。例えば、蛍光灯の音も自閉症の子たちには聞こえています。私たちはあまり感じないのですが、建物の中には、すごい音の反響があって、それを敏感に感じていやがります。ずーっと建物の中で耳をふさいでいる子もいますが、その子も山に入ると耳をふさがなくて歩けたりします。

精神障がいの方も人工的な環境だとゆらぎがないので、そういう環境はあまりよくありません。でも、山に行けば風が吹いたり、川の音がしたり・・・それに、寒くなったりする気候の変化などもあり、とてもからだにいいのです。自然の働きかけで、もともとの自己治癒力が回復するんです。障がいを持つ方は自然環境に、私たちよりもはるかに敏感だといえると思います。

さまざまな障がいに適したプログラムづくり

森林療法では、どの障がい(身体障がい、知的障がい、精神障がいなど)に対しても、その方が持っている能力を覚醒させ、引き出し、心身のリハビリテーションをしていくことを計画します。内容としては、歩行・感覚リハビリテーション、カウンセリング、療育活動一運搬作業・収集作業・工作・散策などです。

ただし、同時にユニバーサルデザインの考えを基盤とした、環境的な配慮を行うことも重要です。また、抵抗力の弱い方や森林に不慣れな方の場合、体調不良をもたらすこともあるので、注意と配慮が必要です。

これまでの森林療法の事例

森林療法を取り入れる場合は、病院長さんや施設長さんなどが希望されることが多いです。神戸の精神病院の場合は、重度の精神病の方々で、40年以上外へ出たこともなく、外履きもない、傘をさしたことも何十年もない方もいました。その時は、患者さんと近くの里山に一緒に出かけて、葉っぱを集めて芳香蒸留水、香りの液を作ったんです。そういうことを繰り返してやっているうちに、まったく話さなかったおじいさんが話をするようになりました。

福岡県柳川市の作業所は、室内の作業が中心だったのですが、積極的に外へ出て、ぜひ、森林療法をやりたいという希望でした。でも、町の中なので活動できる森林がない。そこで、お寺が持っているヒノキ林を借りて、1時間かけて山に出かけて、そこで薪を作ったり、腐葉土を作ったりしました。



ヒノキ林での除伐作業の様子



間伐したヒノキの枯損木の枝払いを行っている様子



間伐したヒノキの枯損木を組み合わせ、みんなの居場所を作ります。



里山での整備活動(神戸市の福祉施設)

作業療法が仕事にもつながる

作業療法として行ったことが自主製品につながる例もあります。例えば表札づくり。木を輪切りにして、それに枝などを使って字を手作りますが、こういう材料は、森には無尽蔵にあるじゃないですか。神戸で表札づくりをやりましたが、大都会なので、注文がありました。それと薪、都会でも窯でピザを焼いているお店もありますよね。あとは、無尽蔵にある落ち葉堆肥です。ビニール袋に集めれば労働にもなりますし、それを園芸店に置いてもらうんです。いろいろありますが、私が一番一生懸命やったのは、しいたけやなめこのきのこ生産です。



表札



地域の森林における落ち葉集め作業。集めた落ち葉は腐葉土にして販売します。

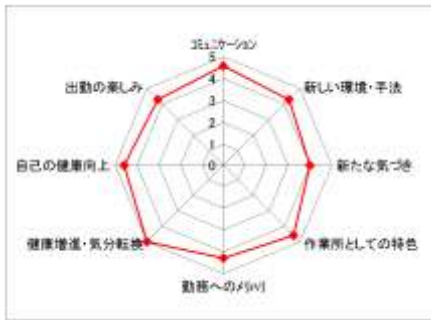


里山の林床での「落ち葉のプール」づくり(神戸市の福祉作業所)

両者をわかる人材が必要

障がいのある方に森林療法を行うときは、森林関係の指導ができる方で、さらに知的障がいの方、精神障がいの方とコミュニケーションがとれる人が必要です。福祉関係の人はコミュニケーションはとれるのですが、森のことはまったくわからない。そうすると人材は2種類必要になります。それに人格が円満じゃないとうまいかない。人材が一番難しいですね。福祉関係の方が、もっと森林に理解を深めてくれて、森林に携わる方が、障がいを持つ方への理解を深めてくれる。これからは、双方から人材が、ぜひ、出てきてほしいですね。そうなれば、障がいを持つ方への森林療法の可能性が、もっと広がっていくのだと思います。この事業がそういう人材の育成にもつながることを期待しています。

森林療法を導入しての福祉作業所の職員の評価



上原 巖 氏プロフィール

1964年長野県生まれ。東京農業大学農学部林学科卒業。ミシガン州立大学農学部林学科留学。信州大学大学院修士課程、岐阜大学大学院博士課程修了。農学博士。日本カウンセリング学会認定カウンセラー。日本森林保健学会理事長。「みんなの森」代表世話人。長野県高校教員、社会福祉施設職員などを経て、現在、東京農業大学森林総合科学科教授。主な著書:「森林療法序説」「実践 森林療法最前線」「ジョン・レノンが愛した森 夏目漱石が癒された森」「元気になる 日本の森を歩こう」「回復の森」他多数。



～NPO 法人 MORIMORI ネットワークの活動～

山村と都会の暮らしを結び、次世代によりよい環境を手渡したいと願い、1995年に設立しました。山村と都会に暮らす人々の交流を通じて森林の保全や再生、都市に暮らす人々の自然体験への機会や、心身の健康への力となる場をつくる活動を行っています。森林に関心のあるさまざまな方たちと、ゆるやかな繋がりをつくりながら、未来の森のあり方、暮らしのあり方を模索しています。



事業内容

- 1 森林と都会を結ぶ交流事業
 - ・みんなのセラピーランド
埼玉県飯能市長沢
 - ・バースデーランド
秋田県北秋田市森吉山
岩手県岩泉町早坂高原
栃木県矢板市
 - ・子どものための「森の基地づくり」
埼玉県飯能市風影
岩手県岩泉町配羅郷
- 2 エコの発想でつくる 森の中の造形物づくり
ツリーハウス バイオトイレ ウッドデッキ
サークルハウスなど
- 3 森の本 出版・編集
 - ・日本の林業(編集 岩崎書店刊)
 - ・子どものための森のガイドブック
 - ・「森と水の国 岩泉」
- 4 森と福祉の連携事業
 - ・福祉作業所との連携



バイオトイレ(飯能市長沢)



作業所の職員さんの間伐体験



バースデーランド森吉山で植樹



球体のツリーハウス(飯能市長沢)



森の実験基地(岩手県岩泉町)

福祉に森ができること

～作業所と一緒に進む森からの創造～



NPO 法人 MORIMORI ネットワーク
〒102-0093 東京都千代田区平河町 1-3-7 アルタ平河町ビル 2F
TEL 03-5226-3305 FAX 03-5226-3322 <http://mori-mori.org>

発行日：2016年3月10日

発行者：NPO 法人 MORIMORI ネットワーク

事業連携：「あらかわモデル」創造プロジェクト

協力：荒川生活実習所 荒川福祉作業所 NPO 法人かがやき

こころみ学園 NPO 法人さんわーく かぐや

シェイドツリー・ユニット 社会福祉法人進和学園 & 株式会社研進

NPO 法人日本森林保健学会

制作：NPO 法人 MORIMORI ネットワーク 長井八美

写真：上原 巖(P16～18) 前川健彦 他

デザイン：ORA デザイン室

※「あらかわモデル」創造プロジェクト

東京都荒川区を中心とした福祉施設等の職員と支援する仲間で構成。情報交換・研修・研究等によって、福祉施設をとりまく課題解決と技術力・支援力向上を目指して活動している。

平成27年度 新たな木材需要創出総合プロジェクト事業
森と川が育む「ゆったり・ゆっくり」かたつむりの森林づくり活動
～福祉作業所と一緒に進む森林からの創造～

